

《講演会記録》

潜入ルポ『中国の女』の取材から

ジャーナリスト 福島 香織



ご紹介いただきました福島です。今日は、最近出した拙著「中国の女」をテーマに話をします。これは、フェミニズムの見地から何かを主張する本ではありません。2009年11月30日付で新聞社を退職し、それ以後、「記者時代のことを書きませんか」と出版社の人から言われたときに、私が書けるものは何だろう、ほかの人とは違うものが書きたいと思いました。

中国はどんな国かを説明するのは大変難しいです。経済や投資、民族問題、政治、日中関係などいろいろな観点、いろいろな人がいろいろな方法で中国のことを分析しています。

経済の専門家が経済の見地から分析し、長年中国を研究している人が政治の

見地から分析するのと同じ方法では、私は遠く及びません。私の特徴は、女性であり、当時、「日本の女性記者、特に、現場に突っ込んでいくタイプの記者は珍しい」と言われていましたので、女性の横顔から中国の今を見てみようという思いで自分の取材経験をまとめたものが、「中国の女」です。

中国における女性とは、かなり特別な立場にあります。子どもを自由に産んではいけないという一人っ子政策があります。完全に1人しか産んではいけないかというところではなくて、いろいろな規定があって柔軟な部分もある一方、今もなお恐ろしいぐらいに厳しい締め付けのある地域もあります。13億人、31省・自治区の広大な地域では、地域差もあれば

民族によっても違うので、一概には言えません。しかし、国際社会上の大国である中国の女性が置かれる立場はかなり特殊です。

日本と中国、どちらが平等？

私は、中国通の人とよく議論になります。私は、産経新聞出身で、どちらかというと保守寄りのものの考え方で中国を見ていたので、日中友好を中心として中国の発展を非常にポジティブに捉えている人によく議論になる問題は、「中国のほうは、男女平等が進んでおり、女性の進出が目覚ましい」、「中国のほうが、若者の発言権が強い」、「日本は、若者が自由に発言できなくて抑え込まれている」、

「人より目立つと抑え込まれてしまう」という意見です。

私は、そういう意見に対して、「いやいや、日本のほうが女性に自由です。中国のほうが女性に虐げられている」という主張をします。「では、中国は日本よりも男女平等が進んでいるか」と言われたときに、「進んでいる」と言う人は、例えば、「呉儀さんのように副首相の立場、外交を担って政治の中枢で女性が活躍している中国はすごいではないか。日本はまだでしょう」と言います。日本でも田中眞紀子さんがいますが、実権も実力も伴う人はかなり少ないのかもしれない。

しかし、国会議員の数を比べると、中国の2007年の中央委員は全部で204人ですが、その中で女性は僅か13人です。その13人は、2007年の第十七期の党大会で選ばれました。

「国会議員なら、全人代（全国人民代表大会）ではないか」と言われますが、政策、立法、その他、中国の政治の実情を決めているのは、事実上、中央委員です。だから、私たちは、国会議員は中央委員だと思っています。全人代の二千余人は、北京市に買い物に来ているような

人たちで、あまり意味はありません。彼らが議員として立法などにかかわっているかという点、そうではありません。

規模としては204人の中央委員中、女性中央委員の数は僅か13人です。第十六期はそれより8人少なかったもので、中国国内では、8人増えてすごく増えたと言われ非常に評価されています。

日本では、女性の国会議員がもっといます。2009年の選挙のとき、衆議院では480人中54人、参議院でも240人中44人もいてずっと多いのです。どういう人が選ばれているかを見ると、中には、かつて映画で裸になったことがある人、元キャバクラの人、サラブレッドのような人、無職の人もあります。民主党の女性議員は、自由に出馬して、若くて経験がなくてもいきなりなっています。政治への進出を見ても、中国と日本を比べて日本が劣っているとは思いません。

「格差社会」、格差もやまやま

もう一つは、退職年齢にも5歳の年齢差があります。女性の平均寿命のほうが長いのに、なぜ、男性の退職が5年も先延ばしされるのか。

中国では、一般に政党、「単位」と言われる国の機関、あるいは普通の国営企業・私営企業を含めて、基本的に男性は60歳定年、女性は55歳定年です。最近是不況で、女性だけを10年繰り上げて45歳定年を採用している企業もあるので、女性が平等に働けるかという点、私は働けないと思っています。日本のほうが男女平等は進んでいます。

中国は、男女格差だけではなく、社会格差や民族格差がたくさんあります。差別されているのは、男だから、女だからというだけではなく、少数民族だからというケースもありますし、大学を出ているか出していないかだけでも非常に厳しい格差があります。農村戸籍、都市戸籍だけでも制度的な大きな差別があります。その中に紛れてしまうと、女性の問題だけを採り上げて言うのもおかしいのかもしれない。

その一つが女性の格差だとすると、女性の格差はいろいろなところにあります。

女性は、生活や環境の差が容姿に出ます。私は、昔、産経新聞で文化部をやっていたことがあり、化粧品とか女性のファッションの取材もしました。その経

験を踏まえて言う、都市や国家の発展度合い、経済の発展度合いは、完全に女性の美しさに出ます。美しい女性が多いかどうかで、その国の発展具合が見てられます。

売春のバックに公安や軍部の姿

最初に、小姐（シャオジェ）の世界を紹介します。今は厳しくなりましたが、一昔前までは、駐在員あるいは中国に出張する人の中で、中国へ行く目的の一つが女性と遊ぶことだという人がたくさんいました。去年、公安（警察）局長が代わりました。そのときに、前公安局長が持っていたすべての利権を切断するため一斉捜査をしました。

北京市に「天上人間」という有名な高級ナイトクラブがあります。一日遊ぶとどのぐらいかかったかと知人に聞くと、「友達と3人ぐらいで行って、女性を何人か付けて、一晩で日本円にして30万円ほど使いました。グラス1杯で1万円、ボトルを入れて10万円が当たり前」と言っていました。その女性たちは、身長は175センチとモデル並みで、中央戲劇学院などの女優の卵です。高級クラ

ブにはテレビプロデューサーや監督が来るので、デビューのチャンスになります。ここの女の子を連れだすと7千元前後（約10万円）という超高級な世界です。

こういうところには、軍部や公安のバックが付いているので、手入れは絶対がない、安心な遊び場だと言われていますが、去年、完全にコネのない人が新しく公安局長に就き、軒並みガサ入れました。

私が潜入できるのは、「天上人間」のような選ばれた非常に高い世界ではありません。小姐の世界も、高級、中級、低级など5〜10段階ありますが、中級以下の取材が主です。

この本の中に出てくる、河南省の地方のクラブの女の子の取材しました。私は、この本の中に出てくる女衞の男は嫌いです、友達の顔をしながら取材しました。彼は、地元公安局長の娘を妻にして公安局をバックに付けたあとで、河南省の西平県で売春の総元締めをしています。女の子たちは、学校を出ていないので自分の名前ぐらいしか字が書けませんし、手に職もないので、お金を得るためには、この世界しかありません。

私が取材をした2005年当時、河南省西平県で、彼女らは、一晩わずか100元、日本円で1、200〜1、300円、どんなに高く取っても1、500円という値段で体を売っていましたが、これはいいほうです。

彼女たちは、歌厅と言われるカラオケ店で待機しています。男性が来て、好きな女の子を選んで隣に座らせて、少し話をして、一緒に歌を歌って、気分が盛り上がったところで外に出てホテルを取ります。河南省の地方のホテルなら、せいぜい20元とか40元です。そして、女の子には100元払い、一晩過します。

当時、河南省でウェイトレスのような重労働をしても、収入は1カ月200元にもなりません。1カ月額面200元でも、そこからユニホームの洗濯代、貸与代、食費、皿を1枚割った、遅刻をしたといつては5元、10元と引かれると、1カ月働いて手取りは100元以下です。

朝9時から夜10時まで足がパンパンになるまで、料理を運び、人の汚い残飯を処理します。食事が出るといっても、「客の残したものを食え」と言われるような世界です。もうやっていられないと思ったときに、彼女たちにとってはいい

性、あるいは、大学中退が多いのです。地方から出て来たので、大学へ行ってもお金がありません。大学の中も格差社会で、お金がなくては惨めな思いをします。夜、アルバイトをしてお金をもらって、少しリッチになります。すると、ますますお金が要るようになって、勉強するよりこの世界のほうがもうかるので、そのままプロのホステスになる女性もたくさんいます。

女性がお金を得る方法は、この世界が一番楽だと思われています。それは、ほかに方法がないからです。これは女性だけかという、男性も結構体を売っています。私は北京しか知らない、田舎のことはわかりません。北京には、ホストクラブが約100軒以上あると言われています。

私がなぜこの世界を知っているかというと、友達のホステスが「憂さ晴らしに行こう」と言うので、そういう世界を知っておくのも大切だと思って一緒に行ったからです。システムとしては全く同じです。カラオケ店に行き、男性がショーのように並んで入ってきます。気に入った男性を選んで自分の隣に座らせて、一緒に歌ったりお酒を飲んだりしま

す。気分が盛り上がったところで連れ出すというのが普通です。お金のないときは、女性が自分の家に連れていくこともあります。1000元程度のビジネスホテルが北京市でも非常に増えているので、大抵はそういうホテルに連れていきます。

男性の値段は女性より1、2割増しです。男性は1、500元が普通、時には2千元という値段を平気で言ってきます。男女格差は、こういうところにも反映されています。

出稼ぎ仕事は売春かゴミ拾い

こういう世界がどのくらいあるかというの、はっきりした統計はありません。中国社会科学学院の非公式統計とかたちで現地の新聞にも引用されている数字によると、夜の世界に入っている女性は約600万人です。予備軍を入れると、その倍はいると思います。予備軍はどういう人たちかというと、こういう世界に陥る可能性を持っている人です。体を売ることを決めてはいませんが、そこにいれば体売って世界に陥るような仕事をしている人たちです。この人たちを含

めると、2005年頃には1、200万人と言われていました。もっと多いという説、800万人という説もあります。が、正確な数字はつかめていません。多いのか少ないのかというと、私は相当多いと思います。女性は、13億人の約半分として、そのうち結婚している人と子どもと年寄りを除いて、適齢期の女性で容姿のいい人だけを考えると、その世界に陥る人は相当多い。

きれいな女の子たちにはこういう道がありますが、きれいではない女の子たちは、お水の世界で生きていくのは厳しい。北京市では、最底辺の仕事として売春と並んで、ゴミ拾いがあります。各地でペットボトルとか鉄くずとか空き缶を分別して業者に売るとお金になります。非常に割のいい仕事です。ですから、若く学も技術もない女の子たちが陥る仕事は、売春かゴミ拾いです。ゴミ拾いは男性もできるので、女性だけではありませんが、女性がやってはいけないこともあります。

四川省から出てきたゴミ拾いの女性を取材しました。「頑張れば、1カ月千元ぐらいになる」と言っていました。家に行く、いろいろな食器がそろっていま

す。みんなごみ処理場から拾ってきたものです。私はそこでご飯を何度も食べました。私は、そういうところに行くと思いを決して、出された料理に箸を付けます。ご飯と一緒に食べることは非常に重要です。スラムのご飯は意外においしいです。四川人たちは、こんなに貧しくても食べ物にこだわるのだなというくらい、手作りの辛味噌はおいしいです。唐辛子で殺菌されているからいいと思って食べたなら意外にいいしくて、「おいしいね」とほめると非常に喜びました。

私たちは、彼女たちにはいつもお世話になっているので、遊びに行くときに卵を20個ぐらいお土産に持っていきます。すると「お返しをしたいから、じゃあ、これを持ってかえりなよ」と言って、ごみ拾いで拾ってきた、その水はこの水だというぐらいの水で洗ったペットボトルに手作りの辛味噌を詰めてくれます。持っただけですが、さすがに食べる気にはなれません。

北京市で同じ出身地のごみ拾い同士が一緒になった男女に会いました。何度か通っているうちに、1人の小さな女の子がいたはずなのに、ある日忽然といなくなりました。聞くと「親戚に養子に出し

た」と言いましたが、周りの人に聞くと、「あれは売ったんだよ」というのです。これは、今は強制撤去されてなくなりましたが、北京市の西の集落で聞いた話です。

北京にもあった人身売買

最底辺の女性は、体を売るかごみ拾いになるかです。中国の常識で言えばどちらも軽蔑される仕事で、どん底の生活をしています。この人たちは農村戸籍で、出稼ぎに出て、戸籍が違うところで結婚して子どもを産んでいるので、この子たちには戸籍がありません。戸籍がなくて誰も管理していないので、お金が足りなくなり、育てられなくなったら売ります。いくらで売ったのかは分かりません。ある人は「5千元で医者に売った」と言っていました。

四川省の出稼ぎ者の集落は、西側の再開発地区に指定されていて、いずれはさらに地にして軍の高級幹部の住宅地になる予定の土地でした。そこにある家はいつ強制撤去されるかわからないので、すべて2畳のスペースに区切って、1カ月100元とか200元の安い値段で貸しま

す。こうしたところに同じ集落同士の人間が集まって暮らすスラムが出来上がります。このスラムに、免許を持たない医者がいます。つまり、闇医者です。ほとんどが産婦人科医で、堕胎や出産を扱っています。

こういうところでは、一人っ子政策の管理が行き届いていません。子どもをたくさん作りますが、生活が維持できないので売ってしまうしかありません。売るときには大体医者に頼むらしいです。2005年、2006年に、北京市で子供を売った経験のある女性本人から聞きました。

中国女性の価値観が悲劇を生む

農村はさらにひどいです。先ほどの女衞は「(都市での売春は)農村に嫁ぐより、よほどましな生活だよ」と言いました。

例えば、河南省の上蔡県文楼村では、村の約半分がエイズ患者だと言われています。この村に行くと、いたるところに墓が見られます。土葬なので、畑の中に墓がいくつもあります。草が生えていない墓は埋めたばかりの墓です。草がぼう

ぼう生えている古い墓もあります。この数年間、毎月のように何人も死んでいます。

それを政府が外部から隠そうとしているため、この村は閉ざされて未開放地区に指定されています。「本当は、取材してはいけない」と言われましたが、現実を見たいのと好奇心が勝って、禁を破って入ってしまいました。

最初、エイズの取材をしようと思っに行きましたが、エイズの犠牲になってるのは女性だと思いながら見ていました。あるお母さんはエイズ発症中なのに、2005年の春節に男の子を産みました。また、この母親が生んだ女の子は3歳近いですが、言葉が話せないし、エイズに感染しているので弱っています。その上に8歳の女の子もいます。その子はなぜかすくすくと育って、見た感じは健康そうでした。1人目と2人目の女の子を産んだあと、体力が落ちてエイズを発症しました。そのあとに男の子が欲しくて3人目を産んだというのが、彼女の状況です。

こういう状況は文楼村だけではありません。1993年頃に新しい改革開放で中国が金儲けをしようと言っている中

で、河南省は農村だけで、産業らしい産業は何もありませんでした。人口が1億人ほどいる中国で一番人口の多い省で、売るものといえば「人」しかありませんでした。売春婦も多いですが、血を売る人も多いのです。売るものは「性」か「血」のどちらかだという非常に貧しいところです。

美しくない女性を含めて農村の普通の人たちは、現金を得るために血を売りました。採血の器具は使い回しです。「血頭（シュエトウ）」と呼ばれる人たちが、血まみれの針とチューブを持って農村を回って血を採りました。

400ccで35元程度の収入があります。血を400cc採られただけで35元なら、こんなにおいしい話はありません。一晩寝たら100元もらえる、こんなにおいしい仕事はないと女性が思うのと同じです。みんなが農作業をしないで血を売ろうになり、いつの間にかエイズが蔓延しました。

体が弱っていて、「次の年は農作業ができない」と言っていました。子どもにも十分な栄養をつけさせられないので、女の子も発病しました。それでも男の子を欲しがります。「そんなに貧しくても

男の子が欲しいの。産んでも育てられないでしょう」と、つい言ってしまいました。すると、「農村では、男の子を産まなければ、人間として認めてもらえない。それが農村に嫁いだ女の宿命だ。エイズで熱も出ている状況下で子どもを産んだけど、産んだ子が男の子だったと知った瞬間が人生最高だった。それ以上の幸せはない」と、彼女は言いました。

その男の子がエイズである可能性が非常に高く、生き延びる可能性も非常に低いのです。しかも、こんなに貧乏でどうやって育てていくのか。結局、被害に遭っているのは、女性です。女性の地位の低さが原因だと思います。

夫は血を売ってお金を作って、家を建てて奥さんをめとりました。奥さんは、同じ村ですが、工場ですと働いていたので血はほとんど売っていません。夫が血を売ったせいでエイズにかかって、妻にうつしました。しかも、きちんと養生したら生き永らえるかもしれないのに、体力のない妻に、男の子を産まなければいけないという圧力をかけて3人目の子どもを産ませました。

2番目の子どもが生まれたあと発症して、熱で弱って体力もなくて死んだよう

に寝込んでいる妻に強要して子どもを産ませました。私は、そんなひどいことをよく許せるなと思いますが、価値観が全然違います。これは、日本人の感覚でいくら説明してもわからない、中国の農村の女性の価値観です。女性も、男の子を産まなければ人間ではないと思ってるので、命懸けで産みます。そういう意味では、非常にタフだとも思えるし、非常に愚かだとも思えます。

貧しさが生み出したエイズ村

農村エイズの取材はアンタッチャブルな世界なので新聞では報道できませんでしたが、私は随分憤りを感じて、中国の女性は何とひどい状況に置かれているのだと思いました。この村を紹介してくれた友人は、「中国の女に生まれるのだったら、牛や馬に生まれたほうがましだろう」と言いました。昔、農民・労働者は「俺たちは、牛馬じゃない」と言っただけで立ち上がりましたが、そういう世界がまだあったことに驚きました。

エイズの薬は、ジェネリック薬ですが村でただで配布されています。こういう薬を配布しているから、中国はエイズ村

に対する医療政策をきちんとやっている」と報道されましたが、現実的には服薬指導が全然ありません。エイズの薬は副作用がかなり強くて、飲むと気分が悪くなります。農村の人は薬というものをよくわかっていないので、これは悪い薬だ、毒だと思って飲むのをやめます。「こんな薬は怖い」と言って、農村の至るところに薬が捨てられています。すると、中途半端に抵抗力ができて薬が効かなくなります。

ある女性の物語も興味深いものでした。彼女は、男の子が欲しくて子どもを3人産みました。農村では、1人目が女の子だと2人目を産んでもいいのですが、2人目も女の子ですと、無理してでも3人目を産みます。しかし、それは政策の違反になって、罰金の対象になります。罰金は当時8万円ぐらいでしたが、普通の農民ではとても払えない額で、彼女も血を売りました。

彼女の17歳の末娘の出来が非常によくて、鄭州市の重点中学校で3番目の成績でした。もしかしたら大学へ行けるのではないかという状況になったので、彼女は子を出産して、自分とは関係のない人間になりました。夫はエイズで先

に死んだので、彼女は1人で病に伏せています。結局、男の子は産みませんでした。男の子を産むより大学に行ける女の子を産むほうが価値は下という価値観です。

中国は、完全な格差社会で男女差別があります。学歴格差もまた大きいです。学歴格差は、男女格差を乗り越える一つの道具です。それは、農村と都市の格差を乗り越える道具でもあるので、エイズになって命懸けで男の子を産み育てる価値はあったと思って、彼女は後悔していません。しかし、売血エイズでこんなにひどいことになってしまいました。

エイズ村では、もう一つのテーマがありました。天津市の製薬会社が無認可の治療薬を勝手にエイズ村にばらまいて、臨床のサンプルを採っていました。私をその村に連れていった人も、ある種の免疫力を高めるドリンクを農民に飲ませて、定期的に病院に行って数値を採ることを、外部の人から頼まれてやっていた。たまたまその人と友達で、「一緒に行くか」と言われて現地に潜り込みました。

ここは閉ざされた世界なので、製薬会社のやりたい放題でした。そういうこと

をすると、エイズ治療の面では非常によくありません。勝手に臨床実験代にされているいろいろな薬を飲まされると、よくなるものもよくならなくなるという現状があります。

青春を謳歌する若者も急増

そんなにひどい状況ばかりかというと、一方で普通に生活をエンジョイする女の子が増えていることも間違いありません。都会の普通の女性たちは、夜になるとセクシーな格好でおしゃれをして、デートをするなど、アフターファイブも充実しています。

今は就職難ですが、私が取材した2003年頃は、男性だろうが女性だろうが、まあまあの大学を出ると初任給3千元という例が少なくありませんでした。3千元ぐらいの給料をもらっている女性たちが、1本800元の化粧水を買います。これは、普通に使うと1カ月半しかもちません。そのぐらい化粧品にはお金をかけていて、女性たちはみなきれいになりました。都会化していることは間違いないで、そういう女性が増えています。

彼女たちが参考にするのは、欧米よりも東京の流行です。東京ガールズコレクションは非常に人気があります。

当時、ライブハウスでは、ビジュアル系バンドがはやっていて、女性たちが騒いでいました。北京市では、コスプレに命を懸けている少女も結構います。北京市の鼓楼の一带には、密かに「北京の秋葉原」と呼ばれるぐらいアニメの専門店やフィギュアの店が多く、コスプレショップもあります。

この界限に行くと、地下鉄の中や道に、コスプレをした女の子が普通にいます。友達が、「『テニスの王子様』のジャージを着ている」と言いました。普通のジャージに見えますが、女の子に非常に人気がある有名なスポーツ漫画のジャージです。そういう地味なコスプレを普通に町着に來ている子もいるぐらいです。

ウィメンズフォーラムもあります。論壇では、女性の社会進出とか、主婦がいかに、キャリアウーマンがいかにという討論をしています。日本と同じです。主婦の権利はどうだとか、もっと評価されてもいいのではないかという話をしています。「主婦の権利そのものよりも、虐

げられた女の権利をもっと考えろ」と、思わず手を挙げて言ってしまった。日本とそう変わらない感覚の、いまどきの女性の世界があります。

また、北京のOLたちの間では、ヨガやフィットネスも大はやりです。女性のそういう市場は間違いなく広がっています。化粧品も、資生堂が一番期待しているのは中国ではないかと思うぐらい潜在力のある市場です。

北京市は開けているので、ゲイやレズビアンも非常に多いです。地方都市は、同性愛に対してまだ非常に厳しい視線があります。同性愛は、1990年代は破廉恥罪に問われましたが、21世紀に入ってから権利として認められるようになってきました。古い認識や価値観は、地方ではまだ残っていますが、北京市や上海市などは、国際都市で外国人も多く開けています。レズビアンネットワークも発達しているので、レズビアンの女性たちが地方からどんどん上京してきます。彼女らは、「男はもうこりごりだ」と言います。農村では、「お酒を飲んだら必ず女を殴るのが、東北男だ」と言われているぐらいドメスティックバイオレンスが多いです。女性の地位も低いです。

それで、女はもう嫌だという感じで、いきなり虎刈りになり、「私は男だ」と言い出す女性もいます。実際に取材をしてみて、単なる性的な志向だけではなく、社会環境や女性に対する抑圧がレズビアン社会とリンクしていると思いました。

パワフルな女たちの出現

一方、とてつもなく強い女性たちもいます。チャン・イン（張茵）は、「フォーブス」で、中国一の金持ちになった女性だと言われています。この人は屑拾いでした。お父さんは軍人ですが、文化大革命時代は投獄されていました。改革開放が始まり父親の名誉が回復してから、彼女は独学で会計の勉強を始めました。広東省深圳市の人なので、深圳市が特区に選ばれた潮流に乗って3万元ためました。その3万元を持って香港に行くと、香港の屑拾いから、今、中国で市場をほぼ独占している段ボール紙を造る会社を起しました。

ホウ・ウエンジュオ（侯文卓）は、天安門事件のときに四川大学の学生でしたが、民主化に目覚め、オックスフォード

大学やケンブリッジ大学に留学して民主主義と法律を勉強して、民主化運動家になりました。2008年に安全部に18日間拉致され、拷問に近い尋問をされ、それに耐え抜いて出てきたあとに私に電話をしてきました。こういう逆境をばねにしてのし上がっていく女性たちは、非常にたくさんいます。

ツェリン・オーセルは、チベット族の女流作家です。この人も、1冊の本になるような長い物語がありますが、非常にタフな女性です。

フー・ロン（胡蓉）は漫画家ですが、下半身がゆがんでいて、体をゆすってしか歩けない身体障害者です。障害者だから、当時は、嫁にやれない、学校にも行く必要がない。人の邪魔にならないように性格のいい子に育てなければと、お母さんが、学校にも行かせずに家の中で家事を教えました。

そしてある日、彼女の絵がうまいことに気付き、絵具を与えました。彼女は中学校・高等学校には行っていませんが、中央美術学院という日本の東京芸術大学に匹敵するような美大に入りました。そのあと、日本に留学して漫画家になったという特異な経歴の人です。

一方でセレブの人たちがいます。チェン・リー（全莉）はもともと軍人家庭出身の人で、北京大学卒の才媛でしたが、ヨーロッパ人と学生結婚し、ヨーロッパの国籍を取ったあと離婚してアメリカに留学しました。7か国語堪能で、イタリアのグッチなど有名ブランドの知的財産権管理部門の責任者になりました。その後、イギリスの投資家と結婚して、セレブの世界に入って、南アフリカで華南トラを飼っています。人生を懸けて動物保護をやっているそうです。明らかにセレブです。中国には、こういう人もいます。

中国人のタフさが脅威

中国では、バレエを習わせたり、きれいにして、華やかなところで、客が来るとダンスをする特別扱いの女の子がいる一方で、物乞いしている女の子もいます。

中国の女性は、中国の格差社会や現状をそのまま反映しています。女性の様子を見るだけで、中国の現状がわかるのではないかと思います。

こういう取材を通して一つ強烈に感じ

るのは、何てこの人たちはタフなのだという事です。エイズで3人目の子どもを産む体力もさることながら、何か一つ条件が変わると、「体売ってもいい。今、2000円で売っているけど、北京に行って1、500円で売れるなら、私は北京に行く。何とかして」と言って、初めて会う日本人女性にすがってくる女の子にしても、何とタフで、生きることには貪欲なのかと、思い知らされました。

これが中国の怖さです。日本が中国を敵視する必要はありませんが、ライバルとして中国という国を見たときに、中国はこんなにも強い国です。こんなに逆境に強い人たちがいて、1銭でも多く稼ぎたい、少しでもいい暮らしをしたいと、みんなが思っている国だと知らされます。

日本のように、1億総中流に慣れている、今、ようやく下流社会が出て、少し生活を落としただけで、「政府は何もしてくれない」と言っているところとは心構えが随分違うので、本気で競争したら負けると感じました。

取りとめの話でしたが、ご清聴いただきありがとうございました。

(5月20日 アジア研究懇話会)

講師略歴（ふくしま かおり）

1967年奈良市生まれ。1991年大阪大学文学部卒業、産経新聞社入社。上海・復旦大学に語学留学後、2001年香港支局長、2002年中国総局記者として北京特派員。2009年同社退職、現在フリージャーナリスト。著書に『中国のマスコミ』（扶桑社）、『潜入ルポ中国の女』（文藝春秋社）など。

国際善隣協会

平成23年度役員・評議員

《理事会》

理事長	古海 建一（再）
常務理事	金澤 毅（再）
理事	橋本 秀樹（留）
理事	矢野 一弥（留）
理事	青木 友晴（再）
理事	岡部 滋（留）
理事	片山 久（留）
理事	近藤 直利（新）
理事	田畑 光永（新）
理事	成田 正路（再）
理事	福島 靖男（留）

《評議員会》

議長	藤原 作弥（留）
副議長	三原 朝彦（留）
評議員	村瀬 廣（再）
評議員	八島 継男（留）
評議員	新宅 久夫（再）
評議員	國光 史朗（留）
評議員	橋本 公佑（留）
評議員	岡野 駿（再）
評議員	山本 利光（留）
評議員	阿妻 申幸（新）
評議員	石飛 仁（再）
評議員	市岡 敏夫（留）
評議員	井上 充（再）
評議員	岩間 重雄（再）
評議員	神保 達（再）
評議員	鈴木昭治郎（新）
評議員	寺西 修司（留）
評議員	長野宏太郎（留）
評議員	西 忠雄（留）
評議員	久恒 正嗣（留）
評議員	藤沼 弘一（新）
評議員	水柿 一良（留）
評議員	柳原 仁哉（再）
評議員	山口 一郎（新）